

山田隆彦氏はスミレハンドブック（2010、文一総合出版）の序文で、「好きなスミレはと聞かれれば、迷うことなくイソスミレをあげる。」と述べている。私も同感で、「好きな花はイソスミレ」と答えようかと思う。植物生態観察図鑑おどろき編（本多郁夫、2014、全国農村教育協会）のイソスミレの記事に感銘を受け、2015年春に自生地を訪れた。それ以来、さらさらとした砂地に咲くイソスミレがお気に入りになった。自生地についてはそこがどこであるかちょっと調べれば分かるのだが、いがりまさし氏（山溪ハンディ図鑑6日本のスミレ、1996）や本多郁夫氏（前述）に習って地名を伏せておこうと思う。大人数ででかけるとどうしても小さな株を踏みつけてしまう恐れがあるからである。



写真1 典型的なイソスミレの花 スミレとしては大きな花を咲かせる。丸弁でうつつむき加減に咲く。この自生地の花が咲くのは4月20日前後である。

イソスミレの花色は青紫色で、莖色と表現するのがぴったりだと思っていた。ところが、花色に関する記述は図書によってまちまちなのである。手持ちあるいは図書館で図鑑や一般図書10冊を調べてみた。このうち、「紫」と記述したのが5冊、「濃青紫」と記述したのが4冊、「紫紅色～淡紫色」と記述したが1冊であった。原色日本のスミレ（浜栄助、1975、誠文堂新光社）の「鮮やかな濃青紫色」に賛成するが、私のイメージでは「鮮やかで明るい濃青紫色」である。



写真 2 最も生息密度が高いと思われる群落。四方をイソスミレに囲まれる。踏まないように気を付けて撮影する。「薄紫色に煙る」というところまではいかない。往時はいかばかりであったか。



写真 3 砂丘の頂付近は灌木が生い茂る。イソスミレは低灌木のブッシュに好んで生える。夏は日差しを遮ってくれるのだろうか。



写真 4 砂丘の海側はなだらかな斜面であるが、内陸側はかなりの急斜面。2 歩進んで 1 歩後退のよ
うな所にもイソスミレはしがみつくように砂に生えている。



写真 5 砂が吹き付けられる所は、砂に埋もれてしまいイソスミレは葉を広げるのが遅れる。そのた
めに花が咲くのも遅くなって他の個体が満開になるころに咲き出す。前年の莖葉がすっかり埋もれて
いるところを見ると、少なくとも 5cm は砂が溜まったと推定される。



写真 6 イソスミレの実生。ハマボウフウに混じって砂から大量に芽を出した。このうち開花株まで育つ個体はあるだろうか。



写真 7 イソスミレはハマハタザオやハマボウフウなど他の植物と混生することがよくある。この写真は、手前にカワラヨモギが写っていて、イソスミレと一緒に生えているのはハイネズと思われる。



写真 8 花色は濃淡があるようで、この個体は淡色系に見える。

写真愛好家は「足跡以外に何も残さない、写真以外に何もとらない」をモットーとしていると聞く。私は地質を調べるために岩石片、石ころを採集することがあるが、植物は取らない。石ころは自然からいくらかでも出てくるが、植物はそうはいかない。

いがりまさし氏は、「写真は作者の自然に接する気持ちが必ず表れる」と記している。

参考図書

「濃い青紫色」と記述した図書：

原色日本のスミレ（浜栄助、1975、誠文堂新光社）

改訂版原色牧野植物大図鑑合弁花・離弁花編（牧野富太郎、1990、北隆館）

野草大百科（山田卓三、1992、北隆館）

スミレハンドブック（山田隆彦、2010、文一総合出版）

「紫色」と記述した図書：

改訂増補新版日本植物誌顕花篇（大井次三郎、1978、至文堂）、

日本の野生植物草本Ⅱ（佐竹義輔ら編集、1982、平凡社）、

日本の野草（林弥栄編集、1983、山と溪谷社）、

日本山野草・樹木生態図鑑（沼田眞監修、1990、全国農村教育協会）、

植物生態観察図鑑おどろき編（本多郁夫、2014、全国農村教育協会）

「紫紅色～淡紫色」と記述した図書：

日本のスミレ（いがりまさし、1996、山溪ハンディ図鑑6日本のスミレ）